

アムスルだより

No.10 1994年11月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875



ウミヘビの話

一昨年からの屋嘉比島での調査で、アカマタというヘビが夜中に砂の中に頭をつっこみ、ウミガメの卵や生まれたばかりの仔ガメを食べているのが毎年観察されています。食べるものの少ない屋嘉比島のアカマタにとって、ウミガメの卵は貴重な食料になっているのでしょう。ウミガメがかわいそうですが、アカマタも生きるためには食べなければならず、これも自然の摂理なのです。阿嘉島では車にひかれたアカマタの死骸を見ただけで、生きたヘビを見たことがありません。島のおじいさんによると、昔はアカマタをはじめ、ヒメハブなどもよく見たそうです。ネズミ駆除のために放したイタチがヘビの卵を食べたため、少なくなったとも言われてます。一方、海の中に入るとたくさんのウミヘビに出合います。海に慣れた地元の人にとっては、ウミヘビは見慣れた存在ですが、初めて見る人にとっては、陸上のヘビ同様、不気味で恐ろしいものなのでしょう。そこで今回はウミヘビについてお話します。

ウミヘビには爬虫類と魚類に属する仲間がいますが、爬虫類のウミヘビは陸上に棲むヘビが水中生活に適應して進化したものだと考えられています。陸上で体をくねらせて歩くのに役だったお腹の幅広い鱗(腹板)は小さく退化し、体をくねらせて泳ぎやすいように尾が縦に広く偏平になりました。また水中で息が長くもつように、一對のうち片側の肺が大きくなり、胴体の後端まで伸びています。そして多くの種類は、鼻の穴から水が入らないように「ふた」ができるようになりました。こうして水中に30分以上潜ることができ、ときどき水面に上がって軽く息をするだけですむのです。ウミヘビは太平洋からインド洋の熱帯・亜熱帯の海に分布しますが、沖縄近海で見られるウミヘビはコブラ科に属し、9種類います。慶良間の海でよく見られるのは、白と黒の縞模様のはっきりしたイジマウミヘビとクロガシラウミヘビなどです。それと、沖縄の皆さんがエラブウナギと言って薫製などにして食べる、胴体が太くて縞模様のはっきりしないエラブウミヘビも見られます。

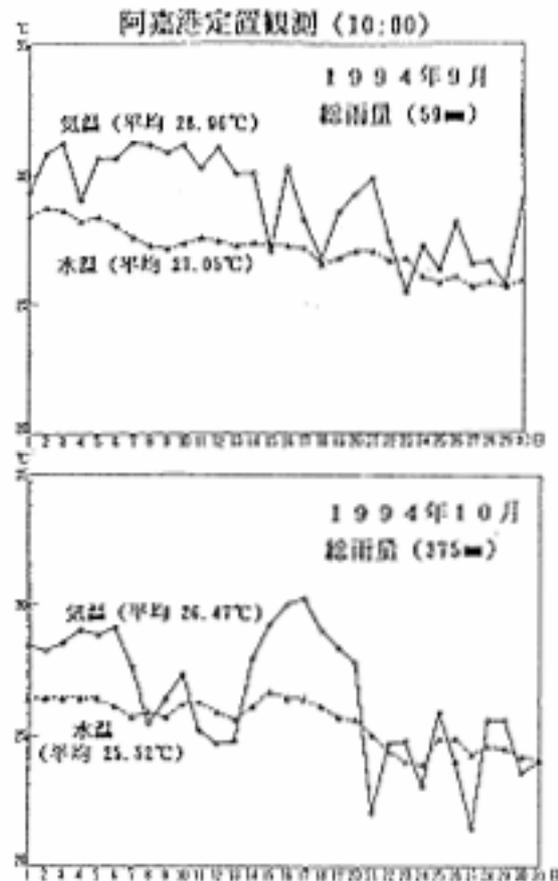
海の中で2~3匹のウミヘビが絡まり合いながら泳いでいる光景をときどき見かけます。これはウミヘビの雌を

めぐる雄同士の闘争か、あるいは雌雄で交尾をしているところです。海中生活に適応した多くのウミヘビは卵胎生で、雌のお腹で卵が孵化し、海中に赤ちゃんヘビを産み出します。しかし、エラブウミヘビの仲間は7~11月頃雌が陸に上り、海岸の洞窟内で産卵します。陸上を這うためか、胴体は丸くて腹板は横に長く、鼻の穴に「ふた」がないことなど、その形態は陸棲時代のなごりを残しています。

これらのウミヘビはコブラの仲間だけあってその毒は強力で、ハブの10倍以上の強さです。咬まれて毒が回った人の半数は死亡しています。エラブウミヘビの仲間やイジマウミヘビは性格がおとなしいですが、クロガシラウミヘビやマダラウミヘビは比較的攻撃的であると言われています。しかし、そのほとんどは、漁師が手でつかんだり、いたずらして触ったりしたときに咬まれており、こちらが何もしない限り、攻撃してくることはめったにありません。たとえ咬まれても、ウミヘビはハブのように口を大きく開けることができず、毒牙も小さいので、毒が注入されない事が多いようです。ウミヘビは夜行性で、その毒は攻撃のためではなく、捕らえた魚などの獲物が暴れないように弱らせるためのものなのです。しかし安全のため注意は必要です。

阿嘉島の海より -冬の生き物-

今から150~300万年前、慶良間列島は今の沖縄本島北部から久米島に続く標高2000mの山脈でした。その後沈降



して山頂が島々として残ったのです。本来なら高山に生息する仲間であるヒメハブが阿嘉島にいるのは、そのためでしょう。気温の低い高山に棲んでいたためか、ヒメハブは冬に活発に活動します。見つけた方は咬まれないように注意し、研究所までお知らせ下さい。

気温とともに水温も徐々に下がってきました。春から夏にかけてにぎやかだった海の生物の繁殖活動もひと休みです。しかし、中には冬に繁殖する生物もいます。サンゴの天敵オニヒトデを食べることで有名なホラガイもその一つです。これからの季節、ホラガイは交尾をし、岩に卵のうを産みつけます。1月10日発行予定の次号では、ホラガイについてお話ししましょう。